

神奈川県立子ども医療センターオレンジクラブ



ボランティアニュース

207号 2021年1月号

発行 神奈川県立子ども医療センター オレンジクラブ事務局

編集責任者 ボランティアコーディネーター 加藤 悦興

〒232-8555 横浜市南区六ツ川 2-138-4 Tel. 045-711-2351 (代表)

ホームページ <https://orangeclub.kcmcvolunteer.com>

ブログ <https://blog.kcmcvolunteer.com>

モンゴルでの医療ボランティアの経験

副院長 上田 秀明



“これだ、私たち日本人のルーツはここにあるんだ”と確信したその瞬間に、あたかも電流が全身を駆け抜けた感じがした。小児科医になって本当に良かったとその喜びをそっと独り奥歯を噛み締めた。時は、2002年モンゴル唯一の小児病院である母子保健センター内の診察室内のことである。布おむつを取ると、乳児の臀部には、紛れもない青灰色の母斑、いわゆる蒙古斑がそこにあったのだ。蒙古斑は生まれつきのもので、4-5歳までに消失するとされています。モンゴル人、日本人、アメリカ大陸先住民、ラテンアメリカ人に高頻度にみられます。人類（ホモサピエンス）アフリカ起源説によれば、アフリカ大陸から出現した人類は、現在のアラビヤ半島あたりまで出て、その後北、南、西へと拡散しました。日本では縄文人が定住したのちに、モンゴル、シベリアなどの寒冷地に適応した蒙古斑を持つモンゴロイドが、渡来してきてミックスしたと考えられています。その後、モンゴロイドはユーラシア大陸からアメリカ大陸に渡ったとされています。そうしたわけで従来より日本人は単一民族とされていますが、DNAによる解析では、少なくとも2つのルーツ、縄文人と蒙古斑を持つモンゴロイドの混血ということが判明しています。ちなみに琉球人、大和民族、アイヌ人は蒙古斑を有しておらず、縄文人由来とされています。

明けましておめでとうございます。昨年はコロナ一色で、大変な想いをされた方も多いのではないのでしょうか。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。年末にボランティア活動をコーディネートする加藤さんから原稿依頼を受けた私が真っ先に思い出されたのは、初めてボランティア活動に従事した時のことで、冒頭の蒙古斑の件はその最中に起きました。それは医師8年目になった時のことです。モンゴルの地に足を踏み入れたのでした。その前の年に心臓カテーテル研究会でモンゴルでの医療ボランティア活動の報告に感銘を受けた私は、活動の中心人物である団長の先生に、次の時は自分も是非随行したいと申し出たのです。当時モンゴルには240万人、その半数が首都のウランバートルに居住しておりました。横浜市全市民の2/3が、実に日本全国の4倍に当たる広大な土地に散らばっている様子を思い浮かべてみて下さい。十分な医療施設、手術室、薬が不足しているせいで、日本では普通に助かる動脈管開存という病気で多くの子どもが亡くなるとの話でした。翌年、日本各地から自主的に集まってきた小児循環器医7名からなる医師団が8月に編成され、私もその班員一員

として潜り込みました。その時の副団長が、当院のジュニアレジデントとして活躍されている黒江崇史先生のお父様の黒江憲司先生でした。まさか20年後には、こうしてそのご子息に当たる方と一緒に仕事をする事になるとは露だに思っておりませんでした。人の持つ不思議な縁を感じずにはおられません。

首都のウランバートル市は1300mの高地にあるためか、空気が薄く、走るとすぐに息が切れます。そうした酸素濃度が低いことも関係しているのか、通常日本で経験するのは2-4mmぐらいの動脈管開存なのですが、検診を行うと、見たこともないような4-8mmの太さの動脈管開存をもつ子供が、少なくとも30-40例以上いることが分かりました。遊牧民の方も多く、検診に来られました。中には無償で治療が受けられるとラジオで聞いて、1000kmも離れたところから、1週間近くかけて一族郎党ごとゲル(テントのような伝統的な移動式住居)と馬で移動してきたという大家族の方もおられました。着ている服や言葉は違えど、つつい日本語で話しかけたくなる程日本人の顔に近いモンゴル人の持つ思いやりや優しさ、そしてどこまでも続く空の青、見渡す限り草地の緑から織りなすツートン2色の水平線を持つ雄大で豊かな大地にすっかり魅了された私は、その後もモンゴルに訪れ、計10回を数える程になりました。

8月のモンゴル渡航の際に、患者数が多すぎて、治療しきれなかった方たちを治療しようと再度医師団が編成され訪れたのはクリスマス前後の時でした。事前にウランバートル空港の気温はマイナス38°の情報を得た私がまず向かったのは、横浜西口にある登山ショップ好日山荘でした。ヒマラヤ山脈でも通用すると説明されたダウンジャケットを着込んで意気揚々と空港の出口に向かったところまでは良かった。1歩踏み出すと、そこは経験した事のない世界が待っていた。息を吸った瞬間にキーンと耳鳴りがし、あまりの寒さに心臓がおののき、僧帽弁が、続いて大動脈弁がパタンと順に閉じる音を感じた。ああこれで死ぬのかなと一瞬脳裏をよぎった時、後ろのお客さんに邪魔だと言わんばかりに突き飛ばされ、ヨタヨタと2、3歩き出したところで足が止まった。不審に思ったモンゴル人の日本語通訳の方が駆けつけ“大丈夫ですか？どうしましたか？”と声を掛けて下さり、“寒くて死にそう”と告げたところ、“大丈夫、すぐ慣れるわよ”と豪快にガハガハと笑われたのは、今となっては良い思い出です。でも間違いなく狭心症や心臓病の方は冬場のモンゴルは避けた方が、無難です。

あれから20年近くが経ち、心臓カテーテル治療もだいぶ進歩しました。今では500-1000gの未熟児にでも使用できるカテーテルが、検査室にあります。コロナのために、人の往来は途絶えることはあっても、スマホ、パソコンなどの画面を通して人々の交流は続いています。まもなくワクチン接種も始まります。きっと良い年になります。もうちょっとの辛抱です。皆様の活動が実り多き年になりますように、また皆様の笑顔が絶えない日々が戻ることを念じて、ご挨拶の言葉とさせていただきます。

「あなたの元気と笑顔のために」

つるし雛グループ 草野 勝美



写真は販売の様子とNICUでアレンジした丑の正月飾り

令和2年(2020年)、新型コロナウイルスのために社会のすべての状況が大変な日々の連続になりました。感染拡大が続く中、医療に従事されているスタッフの方々をはじめ、センターに関わるすべての皆様のご苦勞・緊張を思う時、心より敬意と感謝の気持ちでいっぱいになります。

例年、オレンジクラブのチャリティーバ


ザーを5月・12月と開催してまいりました。〈つるし雛〉も出店を続け、多くの皆様に、つるし雛・飾り雛を展示販売もさせて頂きました。しかし、昨年はすべて中止となりました。年間を通じ、お心を寄せて、ご寄付頂いている、古布や材料を利用して、メンバーの皆さんが心を込めて時間をかけてたくさんの手作り雛を作成してくださいます。今回定例バザーは中止となりましたが、「せめて少しの時間だけでも来院されるご家族や職員の皆様に干支飾りだけでも見ていただきたい」と思い至りました。ご家族で楽しそうに、お気に入りの飾り雛を捜してくださっている様子を、大変うれしく拝見していました。多くの職員の皆様もお昼休みに立ち寄り下さりました。

「あなたの元気と笑顔のために」—これから私たちは何ができるでしょうか？干支の小さな“丑”飾りが新しい年を迎えるご家族にやさしく温かな時間を与えてくれることを願っています。

今回、皆様お買い上げ頂いた金額は 89,200 円となりました。ご協力、ご支援に感謝を申し上げ、総てをオレンジクラブの活動資金とさせていただきます事をご報告させていただきます。ありがとうございました。

入院中のお子さんたちとごきょうだいさんへのクリスマスカード

きょうだいお預かり・重心施設保育士 吉野紀子

鮮やかなクリスマスレッドの背景がとっても眩しい、立体のツリーが目を惹くクリスマスカード  入院中のお子さんたちとごきょうだいさんへのプレゼントとして、たくさんのボランティアさんたちが約 500 枚手作りして下さいました。心のこもったメッセージ『いつもきみのことをみてるよ、今日はスペシャル☆』『笑顔いっぱいクリスマスでありますように』を添えて、お子さんたちの笑顔を思い浮かべ、素敵なクリスマスを過ごせるように・・・

12月14日に、加藤コーディネーターときょうだいお預かり保育士たちで、ボランティアの皆さんの想いをたくさんお集め各病棟へお届けさせて頂きました。いいえ、正しくはボランティアさんたちの想いの列車に乗せて頂いてお届けさせて頂きました。

10月頃からきょうだいお預かり保育士でデザインを考え、各パーツに分けたキットを作成し、ボランティアさんたちへ郵送させて頂き、ご自宅で製作して頂きました。いろんなことを我慢しているお子さんたち、そしてごきょうだいさんたち。動物の足跡を見て「これは誰の足跡かなあ」などご家族でお話が広がったらいいなあと思いながら・・・

完成され返送して下さったカードにはボランティアの皆さんからの温かい優しいメッセージも添えられていて、本当に私たちもうれしかったです。

今年は思ってもみない事態になり、皆さんがそれぞれに大変な状況でいらっしゃる中であっても、入院されているお子さんたちに寄り添ってくださる優しいお気持ち。ボランティアさんたちに感謝と尊敬の気持ちでいっぱいです。

いつもよりもさらに緊張感のある重心施設での保育。各居室のお子さんたちを交差させないように、距離を保ってその都度ガウンを変え消毒をして・・・あちこちに神経を張り巡らせて必死になってしまいます。あるボランティアさんに『あせりすぎよ〜』と声を掛けていただき、はっとしました。立ち止まって深呼吸。鼻から入った空気がお腹を満たして「は〜」と吐く息とともに体の中のモヤモヤが外へ出ていく気がしました。ボランティアルームにくるとほっとするのは、みなさんの温かい雰囲気満たされているからなのだと改めて思いました。みなさんのお気持ちのこもったクリスマスカードは、きっと受け取ってくれるお子さんたちだけでなく、保育士や看護師やそれを見るご家族たちにとっても、ふっと力の抜ける、一息ついて今年を振り返る時間を共有できるものであると思います。

細かい作業でしたのに、たくさんの方に作って頂き、本当に本当にありがとうございました。



カードは、病棟のクリスマス会などで
お子さんやご家族にお渡ししました。
「可愛い!」「お兄ちゃんの名までありがとう
ございます。」「すてきですねえ」など、喜んで
いただきました。(病棟保育士さんより)

クリーン病棟はガラス越しでのパフォーマンス ホスピタルクラウン チョコ 丸井 明美

「私たちクラウンは、月1回の訪問をさせていただいています。感染症予防のため、面会や遊びの制限がある中、楽しい時間を過ごしていただけたらと思いながら、ホスピタル・クラウンの活動をさせていただいています。総合待合では、密にならないように気を付けながら15分ほどのショーをしています。クリーン病棟はガラス越しで接触せずに、廊下からお部屋のなかのお友達と遊べます。受話器を取らないとお互いの声は聞こえないので、身振り手振りで伝えています。それに応えてお部屋のなかから魔法をかけてくれたり、笑ったりしてくれます。ガラス越しでも気持ちを通い合わせることができるのがうれしいです。楽しい時間を過ごすことができました。そして、一緒に遊んでくれたお友達も同じ気持ちだと嬉しいです。」
どうぞよろしくお願い致します。



ぽぽんたトピック③

キクちゃん

新型コロナウイルス感染症の蔓延は留まる様子は見えない。
病院の子ども達への本の貸し出しは、12月からストップしている。でも、ぽぽんたのメンバーはこの長い時間を自分たちのスキルアップ(技術向上)に充てて、勉強しているのは素晴らしい。
ぽぽんたMさんがパソコンを使って、動画を作り見せてくれた。初めてで慣れていないせいか、演者の表情は硬いが中身は楽しかった。プログラムは、紙芝居、手遊び、絵本、全部で18分ぐらい。そこで、キクちゃんもデジタルカメラを使って動画制作に挑戦。カメラマンは夫に頼んだ。
プログラムは・おはなし・わらべ歌・てあそび・絵本・手袋人形・紙人形・ペープサート・パネルシアター・等を組み合わせて、1本20分位で5本作った。仲間に見てもらった所、キクちゃんが一番届けたいおはなしが、動画を見る子ども達には、じーと見つめられているようで苦痛ではないか?という意見だ。語り手の視線や語り手以外の画面が必要なかもしれない。
これらの動画が出来上がって、病室の子ども達に届けるのはどうしたらいいのかな。

〈お知らせ〉

- * 緊急事態宣言中ボランティア活動は自粛しています。
- * 2月のボランティア調整会議は中止致します。
- * 本館から管理棟への通路に絵馬を飾るネットを用意しています。絵馬に願い事をお書き下さい。

